



琉  
客  
譚  
記  
附  
龍  
步  
紀  
畧  
全

ル 5  
1250



門ル五  
稀 1250  
卷

ル五

疏本評記

外國書

琉客譚記

外國叢書

二十九

兩辰之冬琉球謝恩使尚格寓於江  
都之邸其僚屬有嘗入清者二人曰  
鄭章觀其邦錦  
公顯通唐語乃各二人親問其所歷  
覽勝景佳事二人所說甚詳因命  
精詳以圖字記其語裝為一卷又命  
畫工作圖而附其後以為臥遊之具

琉客譚記序



琉客譚記序  
丙辰之冬琉球謝恩使尚恪寓於江  
都之邸其僚屬有嘗入清者二人曰  
鄭章觀蔡邦錦  
公頗通唐語乃召二人親問其所歷  
覽勝景佳事二人所說甚詳因命  
楨幹以國字記其語裝為一卷又命  
畫工作圖而附其後以為臥遊之具  
云章觀字有先邦錦字日章皆琉球  
久米村人

寛政丁巳春正月

臣 赤崎 楨 幹 謹 誌



琉客譚記

一 琉球乃進貢船を兩艘ありて其第一乃船より百  
 二十人身二の船より七十人ありて其第二船接貢船を  
 一船よりして百人ありて其第三船三月に船より  
 一船より那覇港に碇を起し四十八里日本を經り  
 姑米山乃より纜を引たり風あり帆を引たり洋  
 中よりつまに波濤助漫とて數日山を足り風  
 順あり時を七八日をとりて福島の内五虎門と  
 して所より那覇よりけり四百里餘あり

日本  
里教

一五虎門を内と一條の川くくを潤さ三百圓半  
の所と有り又百圓所の所も有り南岸ハ民家くく  
田畠もありは川をのち流す五里くく有りて  
岡崎とくくありて船を引くは官人出立  
ひく船を引くくむ川は通事とくくありのけ  
所より流船を引くはまよりして中漕ゆ事ハ官  
糶撤とくくありて水舟くくく大船を自由  
ちくす小船を引くく事若を流船へ送り原船  
鴨母州とくくありて船を引く川は通事とくく有り  
流人を引く流船へ入は流船と大保境とくく

所は清和より菅藤より藤藤乃流船より控り  
ありて製頗は情徹あり尾をくくく上は橋を  
板を引く床とくく世下とくく大間あり其其庭堂を  
尾とあり  
一清人乃流船を引くものも把門官といふ文武  
ありあり武官を刀を佩ふ各属官五六人有り  
館乃大門と二乃門との間は官舎有り登六門  
を引く遊観す流船とくくを引く事無有り  
ても出立事を引くく  
一進貢使来三月は福州より流船へくく中流事

七八日斗りくく秋冬乃文九月末十月初の以  
正使副使以下の官負廿人より小至り越くそ  
沿ふく水院館より降りく明年負使乃功高  
をすん

一 負使小京へ越く時を延平府建寧府衢州府  
嚴別府杭州府嘉興府蘇州府松江府揚州府  
浙南府東<sup>山</sup>等を経歴し建寧府より衢州府迄を  
陸行す嚴別府より揚州府まで水行し山東  
より陸行し帰程を山東より列宿とてきく水行色  
途中に往來する所の山川極く奇絶なる所の所り

一 荷りて馬かきくを重りくくつりくく

一 蘇州府と揚州府との間より金山寺あり金山峭峻  
奇特ありく意親を後し丹碧相映して偉麗  
りくをあらす

一 西湖乃風景最良あり瓊樓珠閣浮翠 昆嵐の  
間より陸行し蘭棹桂棹淡烟微波乃中に往來す  
る負の嚴程よりくそ往來を極りあすすと得  
るくもへくく途中に諸者の市肆極く華盛  
布帛をうはす所を布帛を色好り米粟を奪ふを  
米粟あり他の高と混むは事なり

一市街を名開し其仲間もさうし一修の列肆あり  
百貨を居たり

一蕪州杭州ありむ殷富ありて無事あり美宅  
廉銀軒をありて嘉樹奇卉産を法りむけ境を  
之は所をさ照らさし圖の中を引りて一羈旅の勞  
れをりし然れ程のをさそをわあつと

一山東をさし其時四五日と四西一山をさし寸至夷曠  
をありて名あり

一山東をさし其時平曠ありて凡る勵し車上を帆とあり  
馳す如くあり

一山東より泰山をさし神秀の所ありて  
姿態萬変ありてあり

一山東の焼酒を中山酒より烈し其最烈しきものを  
焼力としし酒店の牌を焼力とありて牌を丸と  
旗あり又其旗もあり

一酒店の多し聯あり又其店名を牌を張す每省護送  
官より責候を逐法僕従五人涼傘をとりて  
行り

一五省樂を奏す責候陸行の時大小官負り那  
轄をありて僕従を馬に騎或を車に駕り



一 貢使團を之に付抱關人廻羅を以てし、抱をくら  
 貢使の姓を以て余儀より其費を以て法省の官府より  
 出せし宿する所を公館とて、饗具を具せし、福  
 州を九月十日に起程し、早日附を以て十月三日  
 以て小京より海路其程六千里、唐山 里敷  
 一 福州より小京までの間は、唐山大嶽多し、去るれば  
 日本富士山の如き、崖秀、特奇なるものを見る  
 一 小京より琉球に賜物宴賚の禮を以て、中々  
 客亭あり、浦敷、于間四十日余あり、大和殿とて、不  
 所なく、清帝へ降賜す、其殿を廣くあり、子朝ハ蒼

茫として、その阿やれも、  
 後けり、  
 一 中山より清帝へ硫黄一萬二千六百斤、紅銅三千斤、  
 錫千斤を貢す  
 一 清帝より中山王へ綿、足織、合紙、足織、合紙、  
 羅、絹、八匹、紗、十二匹、絹、十八匹、羅、十八匹を賜ふ  
 一 正使副使へ羅、絹、五匹、絹、八匹、羅、八匹、絹、五匹、裏、二匹、  
 布、二匹、宛を賜ふ  
 一 小京都通事、在留通事、一紙、五匹、絹、五匹、絹、三匹、宛  
 を賜ふ、存留通事、を福州琉球へ、  
 を賜ふ、存留通事、を福州琉球へ、

りふ

一使者の儀從へ絹三匹布八匹を賜ふ  
一朝鮮琉球安南緬甸乃四外國を次席として清帝へ  
拜謁を

一緬甸人の貌を漢人の如く志うれとも奴を刺す  
一吏部尚書乃宅より西夜宴を賜ふより  
至る少儀時を下馬宴といひ國より歸朝時を上馬  
宴といふ其後先卓子よよ番を替りて聖を賜ひ  
のち酒饌を賜ふ其盛華を極ふはすといひ  
當一靴一宴終りて後卓子よの器皿を賜ふ

冬よりこれを持ちて歸は

一貢使國より歸は時を接貢船より  
一貢使清帝へ拜謁乃時を琉服を用由中山王冊  
封使を遣ふ時を明使を用由むかへ祖之の時  
明帝乃初めの形を以て國より是を後す  
をゆす陪臣をこれに後す  
一北京城郭の周回四十里 唐山里教  
一北京を去る寒烈しその内を雪にて降りて兩降は  
川氷ふ時を車馬も行かざる  
一地の平なる日本より

一雷乃子ありて日本に回一

一清帝乃姓を覺羅ありて是は元姓の人を多くて其  
界は今の福建省の布政司也覺羅位を以て人  
形

一清帝太子を立れ皇子の内を初めよとて帝の  
之を以て太子を定め其名を書し密封し  
庫内ニ藏む帝崩御の後大臣列拜し玉封を  
開き初て太子を知は

一清帝友女の人皆滿人あり帝滿人ニ對せんてハ  
滿語あり漢人ニ對せんてハ漢語あり皆中

一多那滿語あり朝廷を皆漢語にて申すハ漢人  
一人も之を法らざる漢語のありて官女も多那滿人  
なり

一禁城九門の内を滿人たりて其ハ滿人を旗下の  
人とし

一宰相四人の内二人を滿人二人を漢人あり  
滿人を漢人の上列にありて其ハ漢源大士の官  
人とし

一宰相四人の内第一大學士第二尚書第三侍郎  
第四學士あり

一琉球冊封の時正使を滿人あり副使を漢人あり即  
周煌を漢人あり金魁を滿人あり

一滿人文武並備の人を任用を漢人の官武官  
かのく一是なり

一滿人常々兵船を帯てを事所々付ハ海を常々  
滿漢乃官人一品を皆驕り予教二京以下を或ハ  
馬所ハハを車又ハハ

一六部の官人禁城中をを教時を從僕七八人  
之ヲ記を

一九門の外を外國人遊觀を許し自由あり

一各衙門より太鼓を奏し時を報ひるれを衛鼓と  
ふ退朝の時を報す法を故鼓といふ

一南京を江寧府と云り城郭を周圍六十里  
唐山里

天下第一乃繁華ありて北京の比ありて

一總督乃官中軍を江寧府にありて  
あり

一神廟日本乃めたるをあり一華表と云一の木  
を多し教のとなり

一士農工商乃位む所各有りて雜り居るなり

一居家ハ夫婦を福と云りて大小廣狭ハハハ

廳 書院 書房 長間を 内房 女の床 有り 内房の上  
多く構有り民家の茅屋あり 下は尾屋何れも  
福町の民家の皆尾屋なり

一 民家いじりくくを用ひ寝居と書く 士大夫以下の  
家々 此中 浴衣を用ひ陽尾と書く 尾巾を  
多く 或は 尾と書く くく 尾板をもく 尾  
かく 尾 有り 其 下は椅子を 並 男女老幼 とも  
共 下 倚り又 中 を 踏坐 する い 女婢も  
又板凳 子 く 板 を 法 を 腰掛 の あ  
上 又 あ 中 す 蒲板 蒲瓦の上 中 は く く の 年

形

一 蒲人 等 古 同 の 席 を 敷 く あ 中 を 椅子 を 用 ひ す  
一 洋人の女子 知 サ の 時 より 緒 を も て 足 を か き く  
一 浦 を ひ 法 を み く 形 大 あ る さ ら や す 卓 の  
一 の を 中 を ひ 法 を み く  
一 食 を 敷 時 飯 羹 肉 菜 等 耶 卓 子 を 並 椅 子 を  
く り く 吃 を い 方 を 並 回 一 卓 子 を 並 吃 す 時 に  
父 乃 椅 子 を 南 面 を 並 法 を り と 身 の 椅 子  
を 法 を り 並 男 女 十 二 三 年 を 並 い れ ハ 卓 子 別 に  
く 吃 す

- 一 中人の心を安んずるを以て
- 一 救火隊を以て皆皮服を以て馬を騎れ其の兵卒乃屋上より射撃する其の先衣上より屋上無事といふ文字有り屋上より射撃する所下無事といふ文字有りその所さうゆゑに
- 一 救火隊より約半柳樵大橋より最長なり
- 一 一省一府一縣より以て聖廟有りその如き所は
- 一 諸省法多の最長を翰林院より山川三年ふゝゝ交代す

- 一 一省一府一縣より以て聖廟あり書院を其の外より
- 一 福州の學校の由は藝苑書院といふ所あり
- 一 北京の貢院より其の外より詩文より
- 一 北京聖廟園の内は大道有り其の中より園子監あり
- 一 一省一府一州より書生を以て其の外より
- 一 一省一府一州より書生を以て其の外より

いふやあるて一者、いふ者人と殿様有りて  
考へて進士といふ一殿様の進士凡三千人  
進士より俸禄あり進士より官より考へられて後  
俸禄あり官ありものゝ進士の爵とていふて  
歸つて

一官人といふ此進士の内より擢とありて  
吏人より官より擢とありこれと大官と  
すむなり

一民家男子五とあるは、其父兄御先きを  
得て白袴を授く

一女子も五六とあるは其父母女を授く  
女訓を授く是女の女を授く高訓を授く  
そのを女先生と稱す

一象を安南國より山川元具は象と稱すの  
装束をいふ其背より形を香爐を有するを  
七門の内午門より象は法あり

一犬の毛種をあり虎を捕噬る  
一虎の毛を剥乃細よ入るるものを  
一神もあれは有りて毛種をいふ  
一

一 猫を多くとて爪をありきり黒白も有り短文  
 ありふも有り其ち亦物と見え  
 一 水たも有り福ありきり  
 一 恆念奇獸 其名のをゆきそ  
 形を見ても  
 一 路傍奇花美草をそと名をきり  
 一 茶の佳味 其のを武夷茶竜井茶紅梅茶  
 等あり  
 一 酒の美酒ありものを蘇州乃福名酒湖州乃  
 烏程得酒等有り

琉客談記跋  
 薩侯老公隆儒好文風流遊戯之餘  
 好作漢語清濁輕重宛如清人口氣  
 寬政八年中山王尚温謝恩使王子  
 尚恪來中山於薩禮如附庸故一  
 行陪臣例皆館于薩邸  
 老公聞其儀衛正鄭章觀及樂師蔡  
 邦錦皆嘗入清學于福學召至榻前  
 親問其在清中所觀事交語皆不因  
 舌人往復如響云既而親譯諭其儒



臣赤崎損幹記以國字輯為此書清  
國朝野禮俗粗可概見焉此回邦彦  
亦奉  
幕旨至薩邸見鄭蔡二陪臣問事  
皆賴舌人而通言歷數節徃復而後  
事始可粗知焉猶未能了愉快如  
老公之為也邦彦不才幸載筆食  
朝不能望  
老公遊戲餘事是可耻也  
丁巳孟夏

奉朝儒負柴邦彦撰

龍涉紀略

外國叢書

三十止

本館新刊叢書

龍涉紀略

龍涉紀略  
遼荒沿革傳聞異辭黑龍江尤為絕域古史書而不詳盛朝大一統之化方隅日廣余備極搜討得梗槩焉蓋自奉天過關原出威遠堡關而郡縣盡外有七鎮曰替林烏喇曰寧古塔曰新城曰伊蘭哈喇屬寧古塔將軍轄由新城之白都納度諾尼江而北曰卜

東北  
廣輿記載沿腦溫江上自海西下至黑龍江按後魏

有黑水部唐有黑水府、治在今閑原懸而今之穆  
林寧古塔新城隸焉以黑水名者因黑龍江尾也黑  
水部四至無考今腦溫江在蒙古境內  
卜魁站名土人謂在新城之北八百里距七站或曰  
大力人為布枯曾有布枯居此故名今曰卜魁誤也  
或曰有達呼里人名卜魁耕於此或曰元置軍民萬  
戶府五一曰孛苦江今卜魁枕腦溫江而孛苦江未  
知所在舊站去城十五里地名齊齊哈喇立城後移  
站於城、因站名官文書皆稱之  
墨爾根河名鎮城依河西在卜魁東北四百二十里  
距六站相傳康熙初年掘井得石有莫來耕三大字

繫唐年號余按唐疆宇不及此且非誥誡勒石語也  
艾渾在墨爾根東三百四十里距五站一名艾渾言  
可畏也鎮城在黑龍江西岸江之東有舊艾渾城相  
傳元黑龍衛城也自鎮城西北千一百里為雅克薩  
城舊趾過此而西人千餘里今邊界立有界碑  
按與表里龍江將軍境東至海五千里西至喀爾喀  
界一千八百里南至松花江八百里北至俄羅斯界  
三千里據卜魁言也其言松花江指白都納云左與  
諾尼交會處俄羅斯自西北袤延至正北為地甚廣  
今界碑在西北即班裕里必奔河之東而北有山為  
限

考四境元時蓋隸版圖明時皆蒙古席帛達呼里紅  
呼里索倫散處之

國朝云初恭歸附焉後俄羅斯侵入境內築城曰雅  
克薩人順黑龍江而南據呼麻拉康熙二十三年  
上命寧古塔副都統薩布素率舟師由松花江湖黑  
竜江上流伐之彼自呼麻拉退保雅克薩城大兵於  
艾渾立城与之和拒康熙二十八年圍雅克薩城攻  
之急彼遣使間道詣

關額請

命解圍聽其志而雅克薩城廢西距千餘里立界石  
艾渾遂永為重鎮以薩布素為里竜江將軍從征軍

士自寧古塔遷婦女家焉俄於墨爾根設泰領卜魁  
設副都統分兵為四鎮康熙三十二年薩師以墨爾  
根居兩鎮間首尾易制奉請移節而艾渾改駐副都  
統康熙三十八年復以墨爾根地瘠不容衆奏移  
卜魁而墨爾根增置副都統今將軍仍稱黑龍江者  
沿艾渾立官之始也

俄羅斯古大食國歷今一千七百一十餘年元太祖  
與其弟分收地其弟滅俄羅斯即以封之曰察罕汗  
白為察罕汗即可汗之稱國仍舊名元入中土沿腦  
温江黑龍江置驛歲與察罕汗通問慰江岸踐趾猶  
有存者其王都曰脫博斯奇城近邊曰尼撲處城邑

楞額城尼爾若斯城尾爾若斯有總管駐守入通市  
者皆泥模處人別其種曰羅刹誤差鎗又誤老卷  
卜魁城之南諾尼江以東通銓河以西蒙古杜爾伯  
持地輿表云杜爾伯特東至黑龍江將軍界一百四  
十里西至札賴特界三十里南至郭爾羅斯鎮國公  
界一百四十里北至素倫界一百里  
杜爾伯特以南至松河里江北岸蒙古郭爾羅斯地  
按輿表郭爾羅斯東至杜爾伯特界八十里西至本  
部輔國公界一百四十里南至烏喇將軍界一百四  
十里北至杜爾伯特界一百二十里蓋杜爾伯特地  
象曲尺與郭爾羅斯錯故東北皆倚也

卜魁城西渡諾尼江蒙古札賴特地輿表云札賴特  
東至杜爾伯特界三十五里西至郭爾羅斯鎮國公  
界二十五里南至郭爾羅斯輔國公界一百五十里  
北至色衣銓山無交界余按至西當是科爾沁鎮國  
公界郭爾羅斯似誤輿表載科爾沁鎮國公地東至  
札賴特界可證  
黑龍江以南拖心河以北諾尼江以東鄂爾姑納河  
以東八圍人索倫地  
黑龍江以北精奇尼江源以南虞人鄂倫春地其象  
夾精奇尼江以居  
鄂爾姑納河以西枯輪海以北鄂羅斯虞人地

祐輪海以南喀爾喀河以西巴爾虎地

山川

卜魁以南至新城數百里皆平漠其三面之二百里內亦無山過此則巖岫環壘多從興安嶺發脈而溪澗波湖云水滢洄於境內有以數百計皆蒙古名莫曉其義最大者三江黑竜精奇尼諾尼也寧古塔屬之松阿里烏蘇里二江與諾尼里龍會為混同而受境內諸支流故並紀之江曰烏喇河曰必拉湖曰諾羅海曰鄂模黑竜江源明一統志云出北山盛京通志亦祇云

出西北寨外今按江源出俄羅斯境其上游為敖嫩河敖嫩源出阿母巴興安諸山之南東流六百里與科勒蘇河合又東北八百里受衆流為黑竜江北會泥模處河經泥模處或東又三百餘里北流至昂班裕里必齊河界碑入我境東抵察哈鹽峰尼一千五百餘里復東南流六百里經多斯峰呼麻拉故壘之間至額蘇里與精奇尼江合其合處猶未至艾渾數十里也

過新艾渾城東門稍東南流經拖里爾峰博枯里山西北至蘇爾喜峰之北又折而東經茂峰嶠水之間葉爾白黑河與松阿里合西北視艾渾城已千里矣

江在俄羅斯境內河之自西而東入江者九曰巴爾  
督曰阿哈楚曰他爾巴哈參曰因魯泰曰他拉巴爾  
集曰持楞曰俄克碩曰俄倫曰昂依德河之自南而  
北入江者三曰樸拉訶集曰因里格曰溫多  
其自界碑橫而東也河之由西北而南入江者九曰  
河集格里必齊曰卓爾克奇曰昂班格里必吞曰俄  
羅曰倭爾多昆曰烏里蘇曰博倫穆達曰額爾格曰  
必勒覃也自南而北入江者四曰鄂爾姑納河曰未  
河曰厄牧勒河曰勞庫河鄂爾姑納為俄羅斯界河  
故其名獨著小河匯此而入江者十有一曰依未曰  
牛耳曰墨里兒肯曰持爾布爾曰根曰開拉里曰伊

密曰持納容曰魁曰莫勒根曰札敦而伊密持納容  
魁莫勒根札敦五河又匯於開拉里以入鄂爾姑納  
連於江  
枯輪海週迴千里在黑龍江之南開拉里河之在其  
南有烏里順河烏蘭泉及俄羅斯之克魯倫河皆北  
永匯於此由鄂爾姑納連江克魯倫河發源之山與黑  
龍江源阿母巴興安南北相望亦大川也  
枯輪海東南八百里內又有噶爾必海烏蘭海市育  
里海以受南北山之水其支河七曰阿母巴哈爾渾  
日伊蘭色模曰喀爾扎布魯克因曰訶爾訶存曰西  
巴拉泰曰呼魯思泰曰喀爾喀谷以距三海近者入



之而仍由烏里順河北注以枯輪為歸宿  
江自察哈鹽峰而南也至呼麻拉城始有支河曰呼  
麻拉河由西北入也其匯入呼麻拉之小河曰他  
哈曰呼集里曰窩勒科曰呼蘭其發源多斯峰下者  
有河曰模林察源河拉商山下者有河曰墨勒爾由  
東北入也斜與墨勒爾相對由西北入者曰枯丁河  
又新艾渾城之前曰昆河博枯里山麓曰孫河入孫  
河匯流者曰占河皆由西北入又朱德赫山發源者  
曰墨里爾克河因勒爾山發源者曰博吞河皆由東  
北入與孫河相射  
江自蘇爾喜峰復折而東也峰云左曰牛滿河峰之

右曰哈拉河又茂峰之左曰吉林河茂峰云右曰枯  
木奴河又有朱春河枯育魯河蘇魯河必占河由東  
北而入江者八也又臥竜旗河五耳噶爾河西株母  
地爾河西鴉雀河通牛滿以達於江者也與牛滿斜  
對曰橫爾芬河過此又有五音河嘉里河富河債河  
葉爾白黑河由西南而入江者六也  
盛京通志云黑龍江即薩哈達江薩哈達者里也金  
史云混同江一名黑竜江水微里考况同原出長白  
山舊名粟末江遼改為混同江土人呼松阿里江金  
志謬宋丸又傳謬松花其流自南而北黑竜江自北  
而南其與黑竜會歷二千五百里之遙則西江不得

混祿明矣松阿里江北與諾尼江合流折而東北受黑龍江又南受烏蘇里江匯注於海因其納三江之大故名混同則其上游未會於諾尼仍當祿松阿里江也金祖伐遼將攻黃龍次混同江無舟楫衆赭白馬竟漲世宗大定二十五年封混同江神立廟致祭蓋神矣所鍾由來舊矣

精奇尼江盛京通志不載精奇尼形容之詞如三誠哉是也江原出境內極北之山在察哈鹽峰之北將及千里江形如了東南流入百餘里合西里母低河復折而西三百餘里至額爾里與黑龍江合河自西北而東南入於精奇尼江者二納爾赫蘇

者河拖喀河也自東北而西南以入者十有七最大者曰阿爾集曰單尼曰西里母低也其小河由阿爾集以達者額爾格也烏能也烏拉喀也由寧尼以達者勒都也怕牛也由西里母低以達者陰鎰也平沙也陽奇爾也那拉也鄂爾慎爾科也木龜也翁額也外此曰烏爾格曰訛莫曰貝敦烏爾格與江發源一山雙以並下不百里而合訛莫貝敦發源於都立寄山後迤邐以入而江將盡矣

諾尼江即腦溫江盛京通志作諾尼蒙古謂腦溫為聖諾尼意同今呼嫩江明一統志云源出西北遼外不可考蓋江之在明為甌脫而一統志載之有茅

指其與松阿里合流處故不知其源今按江源出宜  
呼爾山在黑龍江之南與安嶺下江流自北而南  
經查克達奇山三東額勒克爾山之西循墨爾根城  
北門復稍轉而下抵下魁城西門凡一千四百餘里  
與松阿里江合  
河之自西北而東往諾尼者十有八曰東郭羅曰喀  
犁曰孤墨銓曰訥都兒曰多布科爾曰謳銓曰甘河  
曰雜窩兒曰努敏曰必臘曰拾尼曰河倫木曰祐爾  
奇魯曰梯兒曰機勒曰哈岱坎曰施心也東郭羅  
源于興安嶺與江源斜並遙望水光夾隔近接宜呼  
爾山故誤謂諾尼兩源並出也至滿河互有支幹難

窩兒由甘河達江必臘拾尼由努敏機勒由祐爾奇  
魯河哈岱坎由梯兒河施心由綽爾河  
河之自東而西入諾尼者十有二曰納玉兒曰喀魯  
兒曰倭多曰密奇爾曰墨陸爾曰木訥爾曰訶魯爾  
曰墨爾根曰羅拉喀曰訥木爾曰塔葛爾也密奇爾  
由墨陸爾達江木訥爾由訶魯爾達江羅拉喀由訥  
木爾達江又納玉兒喀魯兒之間有湖曰依克卓勒  
兒奇湖不通江  
境之南界松阿里江發源長白山北流四百餘里徑  
清林鎮城之東又西北流二百里出法塔哈邊折而  
西繞白都納城南西北三面凡三百餘里與諾尼江

合其上游之支河不具載自合諾尼東北流一千六  
百里北會黑龍江又四百里南會烏蘇里江是名混  
同江之南屬寧古塔其北為境內地河之自南而北  
入江者六曰杜林曰阿爾禱庫曰非克圖曰奇普拉  
曰烏淹曰呼拉哈西北入江南流長者曰亦肯河其  
小河由彌肯以達者曰希非勒曰博訶里曰幾兒因  
渾又有敖乾河音達母河阿母巴河皆西北流以入  
烏河之自北而南入江者曰呼輪河其小河云由呼  
輪以達者曰通鏗曰納民曰額渾曰額集米曰呼拉  
庫其呼輪以東河云南匯於江者曰碩羅曰富特庫  
曰木淋曰河集裕富拉渾曰昂班富拉渾曰西林曰

昂班烏那渾曰西席曰昂班呼特亭曰巴蘭江之北  
三百餘里有團海葭源汪濊出坎匯小河十有三東  
連於江曰烏莫盧曰哈木奇曰依春曰查里曰必寧  
曰窩集曰浩曰峇曰洪烏曰木孫曰岡曰哈羅曰阿  
西克灘

烏蘇里江葭源西鳴塔山之北在寧古塔之東千餘  
里歷千二百里北与混同江合將入云數十里東西  
岐而為二自是東北流合黑龍精奇尼諾尼松阿里  
烏蘇里五江之水歷千餘里入海此千餘里內河  
自北而南匯入者二曰奇母尼曰枯魯河之自西而  
東匯入者十有九曰努魯必兒特克曰亦曰富達兒

他拉哈曰莫兒奇他拉哈曰格林曰勾根曰科兒古  
曰阜羅曰多林曰赤克因哈曰必占曰屏陳曰梅枯  
曰昂滾曰奔林依曰喀因米曰約米曰里赤曰法持  
海其由裕林河以達者為昂索米河由昂滾河以達  
者為哈達烏爾河尼米勒河之自東而西匯入者  
二十有三曰敦曰巴拉兒曰必兒古曰由持曰哈  
爾集曰希拉河曰粘達哈曰合里曰刀灣曰希兒巴  
希曰訥母登或曰敦榜曰約民曰葵馬曰憂里曰馬  
哈兒赤曰赫勒里曰祭傳曰器寧曰阿科起曰巴喀  
曰敦達里曰科奔按黑龍江奈源俄羅斯境自西至  
東凡七十餘里精奇尼江源以南北阿里江源江南

北凡三千餘里百谷萬湫莫不循度朝宗重潤之慶  
車軌斯同誠哉主會之大觀也  
興安嶺一曰新安嶺或曰德嶺之支給也盤旋境內  
數千里襟帶三江之左右為衆流發源由卜魁至墨  
爾根艾渾置驛嶺上巡邊者渡諾尼西北數百里則  
陟降取道松柞數十圍高窮目力穿林南行午不見  
日石色斑駁若趙千里畫幅間物有石洞中几榻  
天然如琢行者關草得之藉少憩焉  
察哈鹽峰在黑龍江東北隅山形如剖壁面西南背  
東北峭削千尋根插江底上色黃赤無寸草腰亘兩  
帶深黑火光出帶間四時騰熾不絕天雨則烟煤入

兩乘中延單波上巡邊者舟過其下續長竿取大為  
戲兩帶相去數丈許竿止及下帶也山皆萬木葱鬱  
藍翠異狀雖窮冬不凋

經制

卜魁將軍副都統各一員統八旗旗各收領一佐領  
五防禦一驍騎校五大器營參領一員位訓練入旗  
量撥宮佐之無定制先鋒營佐領二選於八旗非特  
該也墨爾根副都統一員人旗共收領四防禦二旗  
各佐領二驍騎校二堆銀籃旗佐領驍騎校各一無  
火器營而先鋒營如卜魁制艾渾副都統一員收領

與墨爾根同旗各防禦一佐領三驍騎校一火器營  
統於卜魁參領訓練如卜魁制先鋒亦然

卜魁兵二千有四十滿洲漢軍監索倫達呼里也爾  
虎克之艾渾兵一千二百無巴爾虎餘同墨爾根兵  
九百皆索倫達呼里人三城佐領滿洲二十有九又  
沃鴉拉別部籍人滿洲者佐領三索倫十有一連呼  
里二十有人巴爾虎四漢軍六計八十一員分轄其  
衆歲於九月大閱

卜魁戶口二萬有二十七墨爾根五千七百三十八  
艾渾一萬三千有二十四漢軍達呼里巴爾虎兵役  
以及站丁點奴皆與焉商賈往來無定亦立冊以稽

三鎮二十取各千總一筆帖式一丁三十名馬三十  
匹牛二十頭管取官二各司十驛一駐一駐一駐墨  
爾根土人稱為站官

卜魁水師營總管一四品官二五品官一六品官二  
四品五品六品者猶之佐領防禦驍騎校也皆漢軍  
為之艾渾官制同而統於卜魁總管水手皆流人充  
役卜魁三百一十九艾渾四百二十七流人漸多或  
老懦者則輸賞正役曰幫丁水手食兵餉之半故一  
正予一幫

戰艦百餘黑竜江者六隸諾尼江者四連繫貯水師  
營庫八月將軍副都統率水師楊旂鳴鈺鼓使凡於

中流凡三日

戰艦五年大修十年拆造就林營林故營林又名船  
廠凡几繫執鑿之屬皆附船致之卜魁艾渾諸城

卜魁艾渾官莊各二十墨爾根官莊十一莊二十夫  
夫輸穀十石并制斛三十石草五百束歲歉則計分以減今

貯倉者卜魁積十二萬石墨爾根艾渾各三萬石卜  
魁初立城值歲饑將軍沙納海盡發倉穀以賑并撥  
附米珠船以濟布塔哈烏喇引罪人奏議於末歲厄  
種還倉請勅蒙古助牛力

上允其請溫語褒之因人至今感述其事  
索倫本名索義羅地產貂以捕貂為役居地詳方隅

分八圍共四千九十餘人就用其人為佐領六十九員轄之更設烏和里大依里奇大統烏和里大猶總尉也依里奇大為副皆八旗人其在城之索倫兵七十餘人則初設鎮時收入八旗者不在八圍之內亦不應捕貂役

達呼里索倫屬俗誤打狐狸語音與蒙古稍異間雜語當是元代軍民府之遺索倫達呼里諸部涵沐聖化貢身朝廟近頗以材武自表見有為近侍者邊人嘗

三城兵籍達呼里居散之乎一魁滿洲兵五百八十  
七十四巴爾虎二百四十達呼里九百二十五艾渾  
黃洲兵五百八十漢軍一百二十索倫五連呼里兵

五百墨爾根索倫  
與達呼里共九百

巴爾虎者喀爾喀中之一部也居也詳方隅其戍此者闖入俄羅斯境大軍征俄羅斯未歸遂編入旗今充兵者二百四十人即以其人為佐領

三城軍器之散在兵者以時修補新舊相授受火器貯官庫操練之時出之

卜魁官馬千牛千羊萬歲計其孽息均賞三城軍卒墨爾根艾渾谷道人來應打草役皆腰長錄著桦皮

冠

五月三城各遣大弁率百人巡邊至鄂爾姑納阿以兩俄羅斯地察視東岸沙草有無收痕防侵界也



往返谷五六十日。下魁往者彼諾尼江指西北。遇持  
爾枯爾峰與安嶺。涉希尼容河。阿拉里依木等河。草  
路淤漫無轍跡。辨方而行。剝大樹皮以識歸路。墨爾  
根往者亦渡諾尼江。西北過與安嶺。盤旋層嶂中。其  
路徑為易識。艾陣往者從黑竜江。開舟北上。抵而西  
過雅克薩城故墟。至取碑。路多蝨如蜂。其長徑寸  
天無風。或雨後更熾。行人嘗虛廬帳以納蝨。而宿于  
外。帶十數存。下人始得餐。齧馬牛流血。身股盡赤。馬  
軼覓深草間見蝨。高如邱。知其必斃。棄不顧矣。囊  
餼糧。於樹。歸時取食之。近頗為捕生者。所竊乃埋而  
識之。波河伐樹為筏。馬馮水以過。俄羅斯居有

城屋以板為瓦。廊廡隆起。層疊望之。如西洋園畫。耕  
以馬。不以牛。千百為群。放於野。欲食牛則射而仆  
之。或以蹄。或卒。攜一線。值三四金。有易二馬。烟草三  
四十易一牛。

秋盡俄羅斯未互市。或百人。或六七十人。一官統之。  
宿江之西。官居。擅幕。植二旗於門。衣冠皆織。獨為之。  
禿袖方領。冠高尺許。項方而約。其下行坐。有兵卒監  
之所。携馬。牛皮。毛玻璃。佩刀之類。易綠布。烟草。薑。椒。  
錫。錫諸物。以去。俄羅斯來文二函。一彼國字。一蒙  
古字。貴官與商賈。名悉載。康熙丙申歲。來文。稱察罕  
汗。一千七百一十六年。蓋題自有城郭。人民始也。署

銜具先代官職於前重世祿也將軍以其文達兵部  
理藩院  
出爾罕者兵車之會也地在下魁城北十餘里定制  
於草青時各蒙古部落及虞人胥來通市商買移肆  
以往艾渾墨爾根屠沽亦皆載道輪蹄浴繹皮幣山  
積牛馬蔽野集初立劃沙為界各部落人駐其北商  
賈官卒遊人駐其南中設兵禁將軍選貢貂後始聽  
交通凡二十餘日  
貂產索倫之東北捕貂似犬非犬則不得貂虞者往  
還當自減其食以飼犬犬前驅停嗅深草間即貂穴  
也伏伺噲之或驚窺柵未則人大皆息以待其下犬

惜其毛不傷以齒貂又不復戕動納于囊徐俟其死  
人歲輸一於官各私識毛色彙仇領處五月將軍至  
旋陽選以貢凡三等官給價有差不入等聽鬻  
紅呼里索倫屬俗謠紅狐狸應禱貂役隸八圍之內  
鄂倫春與俄羅斯接壤隸籍者五百六十五人十依  
轄之輸貂如索倫制  
混同諾尼諸江汜產珠布塔哈烏喇歲有打珠船來  
采以貢有珠之河水冷而急以大船夾藏瓠植蒿透  
底數人持之泗者負袋緣蒿而下得蚌滿袋貯藏瓠  
中官督割之未成珠者仍棄於水私采之禁等於刷  
參藏瓠獨打鷹流人役也人歲輸二鷹以海青秋黃

為最貢無定數多不逾二十常倍備之以防道斃艾  
渾墨爾根谷三十架送下魁將軍彙選之  
江水始獵恭領以下獵雉將軍獵野禽於通經河備  
貢數通鑑蒙古地先期移文告之  
正月雷後黃羊乃大集水師營率水手步獵之槌擊  
輒中  
築城不以土視隈地草土糾結者掘之尺度如擊曰  
望塊厚數堡高不盈丈地則按地分旗飲兵修之

時令

四時皆寒五月始脫裘六月晝熟十數日與京師畧

同夜仍不能答重衾七月則衣棉矣立冬後朔來砭  
肌骨立戶外呼吸頃鬢眉俱冰出必動以掌溫耳鼻  
少懈則鼻準死耳輪作裂竹聲痛如割土人曰近頗  
秣煖十年前七月江即冰不復知有暑也  
墨爾根山城寒益烈臥炕必為通夜之大更設大爐  
然薪于側焰甫盡則寒氣入室臥者驚而起矣數益  
薪始及旦

春月多風四月下旬草始芽間亦早茁而漠風乍寒  
輒復稿牧馬屈五月乃能飽蓄也  
雪有遲早卜魁常在八九月艾渾八月墨爾根七月  
雪不必雪也晴日亦飛霰或皎月無翳晨起而籠暈

已封旭光果雪未已也  
雪化簷無雪則偶懸二五  
十羣以茲卜豐歲  
積雪在地衆煖則滑而無  
流溢視而積日益耗而其  
墳然而日者仍堅凝如故  
也  
冬月窗辟柱冰皆滿踈櫺  
間如飾晶玉午後窗暝不  
能作字火炙之與紙俱落  
春暖乃自消盡錯窻噓乘  
所積也空室則否  
秋分之後微霜以降著花  
減色名為甜霜更十餘日  
一霜而百卉皆盡如出湯  
金是名若霜  
九月地皮裂  
望後月上時與中土異日  
落月隨上也廿二三如中

土十八九時  
南風則雨不雨亦陰晦北風晴

風俗

族類不一容民尤夥氣以黠  
狡歲增綠鬣未化頗稱  
難治幸法嚴無所逃尚畏  
警不敢肆耳官廨文案防  
檢甚疎而無敢為奸弊者  
又其風之近樸也  
一夫力作數口仰食而有餘  
而炊飪浣汲春磴之事  
婦女並習勤苦故居人置  
奴婢價嘗十倍於中土奴  
婢多者為富以其能致富  
也  
各部落聘婦例納牛馬其遠  
者負者或挽媒定其數

先以羊酒往如贅壻然待牛馬敬足而後歸其夫焉  
大將老終不能給慙而去亦聽之其女及所生終其  
身於母家也亦稍除其舊俗矣  
鄂倫春婦女皆勇決善射容至腰數丈上馬獲雉兔  
作笑以餉載兒於筐裂布懸頂上射則轉筐於背旋  
廻便捷兒亦不驚  
索倫人以射獵為生挽弓皆踰十石嘗自縛於樹射  
熊虎洞身曳之而歸尤善蹶蹶人馬有凶失者蹶之  
即得越數百里而知蹤之離合且辨其日次亦里能  
也能  
上元賽神此戶懸燈歲前立燈官圖層僧名於神前

指之銷印後一方之事皆所主文書可達將軍揭示  
有官假法真之語細事亦罰惟意出必鳴金市聲肅  
然官亦避道開印之前夕乃自匿去  
臘月八日達呼里紅呼里男婦並出猴兔取腦為速  
產之藥  
除夕懸弓矢門我間相傳我  
太祖皇帝嘗於除夕克強敵  
帝業由此以成諸屬國艷領之遂沿為俗  
降神之巫曰薩麻帽如兜鍪緣擔垂五色繒條長蔽  
面僧外懸二小鏡如兩目狀著絳布褙鼓色闌然應  
節而舞其法之最異者能舞馬於空飛鏡驅祟又能

以鏡治疾徧體摩之過病則陷肉不可拔一振蕩之  
骨筋皆鳴而病去矣  
多魅為嬰孩祟者形如大小而黑替入土性惟巫能  
見之巫伏草間伺其入以繩索度執及以待紙封性  
門然燈於外魅知有備輒衝繩而出巫急斬之嬰頓  
甦婦者魅者面如死色喃喃如魅語盡行有小犬前  
尊巫亦能為除之

病家束草象人或如禽鳥狀擊鼓作屬詞以祭喧而  
送之梟其首于道曰逐鬼  
東北也有風壘之俗人死以身裹尸懸深山大樹間  
將腐解其懸布尸於地以碎石逐體薄掩之如其形

然

失馬則巫註毛齒聞於官得馬者不敢匿當官歸之  
酬以正布

馬病然草於路牽馬側立口吐、作咒詞

### 飲食

三城之地艾渾為腴產業黍大小麥墨爾根產黍穰  
麥卜魁土最瘠惟產靡、似小米而黃即稷也閩西  
謂之稌夏秋間以未脫者入釜淺湯蟄燻暴以烈日  
焙以炕火礮而炊之香軟可食冬則生礮香稍減  
橫麥瑟厚而粗即燕麥也其實于岳如鈴又名鈴鐘

麥卜料人曰移鎮之初此為常殮購糜不能盈石價  
倍今之稻米十年內始種糜而鈴鑄麥從墨而根來  
僅以飼牛馬間取作粥半得粒三升頗香滑多食作  
來達呼里貴之以其易飽也

稻米甚貴取自藩陽用以待賓客食病者

三城並產蕎麥甘香如雪宜餠餅中土所未得有

卜料四面數十里皆寒沙少耕作城中數萬人感貧  
食於蒙古糜田蒙古耕種咸易其地待雨乃播不雨  
則終不破土故饑歲恒多而後相水坎處攜婦子牛  
羊以往墾廬孤立布種輒去不復顧逮秋獲來草秀  
雜糲計一畝所得不及民田之半竊見

國家立官莊給牛種一兵卒之力歲納糧十石則也  
固非瘠而力亦可用今流人之貴旗者且倍於兵依  
而行之則歲徵糧不啻萬計而樂鰲之輩使皆斂手  
歸農又策之至善者守土者宜亦計及此也

茶自江蘇之洞庭山來枝葉粗雜函重兩許值錢七  
八文八百函為一箱蒙古專用和乳交易与布並行  
掃土為鹽味稍苦色黑去卜料東西各百餘里地名  
喇嘛寺產此三城皆食之白鹽則來奉天

黃米釀米兒酒閱日而成糜亦堪釀味甘而薄祀神  
用之取其速成而潔有醴酒之遺意焉  
艾渾產蘇子搽油南人食之輒嘔久乃可嘗也

東北諸部落未隸版圖以前無釜甄罌甑之屬熟物  
剗木則水灼小石碎水中數十火淪而食之南賈初  
通時以貂易釜竇釜令滿一釜常數十貂後漸以貂  
蒙釜口易之三十年前猶以貂圍釜三迎一釜輒七  
八貂也今則一貂值數釜矣  
卜料西北二百里山崖松枯蕭鬱江水後作炭者乃  
往故直賤於冬

貢賦

貢莫貴於貂与珠已載之經制其黃羊野羴雉鹿之  
獲於野者作邊土之物貢宣矣至於盡其土實厥篚

惟錫納於王家雖蔗節桴苾之微並宜足懷方之盛  
焉

海青即海東青出遼東鷹鷂之最俊者明一統志云  
小而健能擒天鷲今出黑竜江左右  
鶻雞雉屬出艾渾深山中及札賴持地雌者毛色若  
灰雄若濃靛訛呼黑雞歲捕生者入貢  
遮鱸魚類白魚而首銳無嘴味若鱸一名赭鱸一名  
細鱸歲貢百尾九月棲江濱捕而畜之  
改李子柔條叢生高二尺許花碎白實如小李味酸  
滋寧古塔艾渾皆有之  
花水出艾渾色赤望之如豆入口成液離枝十餘日



輒化為水以蠶收為膏充貢  
老鎗菜即俄羅斯菘也抽莖如蒿莖高二尺餘葉出  
層々刪之其末層葉々相抱如繖取次而舒已舒之  
葉老不堪食割球烹之畧似安南冬菘郊圃種不滿  
二百本八月移盆官弁分畜之冬月苞紙以貢  
菱六稜而小產諾尼江去皮乾之  
蕎麥麵更三四磨者白如雪  
艾渾麥麵甘香勝中土所產作餅鬆美  
白聖如粉入水十餘日制其燥塗壁不裂

物產

壯矣產艾渾小而赤似桑甚味酸  
夸蘭磨茹生卜野城東草地內七月入市夸蘭者種  
廬梳木所立之周遭也木氣入土生磨故名今因其  
白色黑蘭名為花蘭乃強解耳  
九鎗穀莖葉如雞冠高丈許實如拼櫚子深赤色取  
粒作粥香美  
花有蜀葵兔葵萱蓼鳳仙長春刺梅金錢土人呼兔  
葵為兔臉葵  
雀兒花色翡翠似鴛鴦菊而單蒂附橫枝上如鳥之  
翔閃微色以巴名似竜爪而小山丹而曲  
草芙蓉不知何以名葉細如皂莢花黃同菊瓣規高

者亭二尺許  
萬年菊花葉類草芙蓉色黃枝柔蒙密延蔓一本可  
百餘花或曰即層瓣高麗菊也  
高麗菊產朝鮮枝葉類萬年菊單瓣色黃赤相間如  
虎皮  
日奇花類蝴蝶花而小一莖十數花辰枚申放數必  
奇故名葉如萱  
高麗蓮即罌粟六月始花高尺許葉如高麗單瓣微  
紅中土人攜千層五色種布之輒變  
菊亦畏霜五月茁枝瘦弱八月移盆入室臨南窗下  
十月花大如錢

棠梨郊圃間有之土人繫縵條於上曰神巫憑伏臘  
祀之有成其枝者則恕不知何取取義  
城內三十里有柳叢生細不及指高不及肩古亦然  
無成樹者花小不實土人老死不知鮮果為何物也  
藥味有益母草赤白芍藥防風黃芩百合木賊蒺藜  
甘草車前子麥蘖冬五味子薄荷黃精艾澤產黃連  
然皆雜烟莽中萎於霜雪無採劄者  
羊草西北邊謂云羊鬣草長尺許茸末圓勁如松針  
黝色油潤飼馬肥沃勝豆粟遠甚居人於七八月間  
刈積之經冬不老大宛首蓿疑即此中土以首蓿為  
菜蓋名同也

索倫立馬身長足健毛短而澤  
鄂倫春無馬多鹿乘載與馬無異廬帳所在皆有之  
用罷任去招之即來有殺之食之斯不復至  
鄂倫春地宜樺冠履器具廬帳舟渡皆以樺皮為之  
黑龍江產魚惟鯽一種諾尼江無蝦蟹而魚屬皆備  
五月魚車塞路長二尺許者價十餘錢六七月水漲  
則大魚不入細江凍鑿冰取之價十倍夏多鯉冬多  
鯁鱖味淡而腥  
勺星魚鱗斑然如列星長喙漁者間以箸探其口齧  
之至死不釋段刀之釜中猶躍也腥穢不可食  
堪達舍駝鹿也項多內陸佃埤雅云北方有鹿形如

駝即此色蒼黃無斑角堅瑩如玉中有里斑橫截之  
鏤為決使理用於外一線勺圓選一決於數十角直  
數萬錢弟世莊有詩曰臙腫額端欺鹿角即當項下  
鬬狼胡可憐骨碎三軍指曾助天山一箭無  
沙雞鳩形鷄毛足高二寸許味勝家雞  
老鎗雁一名千里紅与雀無異惟顛有紅毛產俄羅  
斯地至以十一月四而取之炙食甚美菴畜之輒死  
無蟻  
蚊不入室  
五色石產黑龍諾尼西江岸透明如瑪瑙紅圓者象  
含桃或取以飾念珠

空青魚人聞得之不敢私匿將軍酬以值遣官奏追  
或弁卒自得之即遣送京師奏其名例得賜紵帛  
龍骨艾渾江岸數尺下恒有之或曰龍蛻或曰孽龍  
謫而死者

屋宇

屋皆南向迎暄也日斜猶照故西必設窗間有北牖  
八月槿之夏始啟  
屋無堂室殿三楹西南北土林相連曰卍字炕虛東  
為然薪地西為尊南次之皆賓位也

土垣高不踰五尺僅可闌牛馬門亦如蘭穿橫木以  
為啟閉中土人居之如設門相傳未立城時惟溝其  
宅之四而為界

拉核牆核猶言骨也木為骨而拉泥以成故名立木  
始柱五尺為間層施橫木相去尺許以鱗草絡泥柱  
而排之歲加塗馬厚尺許者堅甚于甃一日柱泥壁  
工匠皆流人技拙而直貴土著人架木覆茅婦子合  
作戚友之能匠事者助而不傭

草屋茅厚尺許三歲再葺之官署亦然煖於瓦也庵  
廟則瓦

卜料柵木為城將軍公署私第皆在夾垣大木中實

以土寬丈許木末高低相間肖睥睨四門外環土城  
黑堡為之周六里西面二門近南者臨水寬廣可數  
百畝江漲則通流墨爾根艾渾重城皆植木為之  
入土城南門抵木城里許高賣夾衢而居市聲頗嘈  
嘈外此雖茅茨相望然草寂烟卷終是塞垣氣象且  
不若中土荒懸郊外惟菴利四五而已余有詩曰夕  
陽巷冷牛羊氣平野天低狐兔秋又曰山雞來井竈  
晝犬吠衣冠觀者可畧見其意

龍涉紀略終

